

第39回

わたしからの
人権メッセージ

2018年度 特選作品集

堺市人権教育推進協議会

第三十九回

わたしからの人権メッセージ

特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第三十九回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

今年は、世界人権宣言が採択されてから、七十周年を迎えます。二十世紀には世界を巻き込んだ大戦が二度も起こり、人権は踏みにじられ、多くの人々の生命が奪われました。世界人権宣言が採択されることによって、世界各国が協力して人権を守る努力をしなければならないということが示されたのです。以来、二十一世紀を「平和と人権の世紀」とするための努力が続けられています。

しかし現在においても、同和地区出身の人々や女性などに対する差別や偏見、また虐待など心を痛める事象が起っています。さらに、世界では、多くの人々の尊い命が、戦争や民族紛争等により失われています。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを積極的に推進しています。

自分らしく安心して暮らすことのできる社会を実現するためには、私たち市民がさまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真つ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢には心を打たれるものがありました。

この作品集が一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇一八年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長 金 丸 尚 弘

もくじ

□ 「へいわつてすてきだね」をよんで	1
□ すもうの女人禁止について	3
□ お兄ちゃん	5
□ 一人ひとりが大切にされるまちに	7
□ 障害のある人の人権	11
□ 女性が輝ける社会へ	13
□ 祖父と車いす	15
□ 祖父と一緒に暮らす	17
□ ハーフとして生まれた私	19
□ 同和問題について	21

□ 障がいがあるということ	23
□ 「みんな同じ」を実現するために	25
□ 私は未来の話をしているんです	27
□ 私のコミュニケーション	31
□ 地震と聴覚障害	35
□ 優しい気持ち	37
□ 認められるということ	41
□ 私は日本人？	45
□ 夕やけの空にひびく「七つのこ」	47
□ 人権について考えるとは何か	49

※ご本人の希望により、お名前等が掲載されていない場合があります。

「へいわってすてきだね」をよんで

小学校一年 稲^{いな}本^{もと}絆^{きず}花^は

このほんのだいめいをみたときに、「へいわ」ということばはしつていたけど、どういうことかなってしりたくなつたからよんでみました。

このほんにでてきたぼくは、おともだちとなかよくすること、かぞくがげんき、ねこがわらう、けんかしてもすぐになかなおり、いろんな「へいわ」をかんがえていたよ。わたしは、「うんうん」とちよつとずつわかつてきたよ。わたしも、「へいわ」ってなにかなつてかんがえてみたよ。

ずこうであじさいづくりをしたとき、わからなかったところをおともだちがおしえてくれたよ。そのときにわたしが「ありがとう」っていったらおともだちがにっこりわらつてくれたよ。わたしはうれしかったよ。ほかに、おうちで、おふろそうじのおてつだいをしたとき、ママとパパとにいに「ありがとう」「たすかるわ」っていつももらつて「よかったな」ってうれしくなつたよ。

「へいわ」のいろつてなにいろかな？ピンクかな。どんなかたちかな？ハートかな。みんなでてをつないだら、まるにもなるな。うれしいときは、はやあるきやスキップ

になるな。「へいわじゃないとき」のいろつてなにいろかな？くろかな。どんなかたちかな？おおきなしくやちいさなしくがいっぱいあつまっているな。かなしいときは、したをみてゆつくりあるきになるよ。

このほんの、「やさしいところがにじになる。へいわっていいね。へいわってうれしいね。みんなのころから、へいわがうまれるんだね。」というところがいちばんだいすきです。ひとりでは、「へいわ」になれないよ。だから、おともだちやかぞくをだいじにしたいよ。「ありがとう」のことばもだいじにしたいよ。みんなのかおがにっこりの「へいわ」がずっとつづいてほしいな。



すもうの女人禁止について

小学校三年

奥村真惟 おくむら まい

わたしはすもうを習っていてそこでは、みんな男の子や女の子もかんけいなく楽しくれんしゅうしています。だからすもうが大すきです。

五月に大ずもうのじゅんぎょうが堺市へ、二十数年ぶりに来ました。わたしは、はじめでなのですごく楽しみにしていました。習っているすもうクラブの大人や中学生がボランティアで前日からせつえいなどをするので、わたしも手つだいに行了きました。土俵を一から作ります。わたしは手つだえなかったです。そのときはふかく考えず、ぎせきの用いなどを手つだっていました。はじめてけいけんすることばかりで楽しくてしようがありませんでした。

次の日のじゅんぎょう当日は、ちびっ子すもうにでるよていだったので、朝早くからお手つだいへいきました。

ちびっ子すもうは、大ずもうの力士にむねをかりることができるので、ドキドキ・ワクワクしていました。でも、始まるまで、たん当している人から、「出場できません。」「やっぱりできません。」と二てん三てんした返事がありました。さいごは出場できま

すと言われ、みんなと土俵下へ入場しました。

土俵下で、ドキドキまっていたら「女の子だけあつちでまっついて。」と言われ、おわった子がいる所へ連れて行かれました。そのまま土俵に上がることなくみんなを下から見えました。かなしい気もちや、くやしくて、うらやましくてぎんねんで、色んな気もちがぐわつとわき上がってきて、なみだがこみあげました。人前でなくのがきらいなので、えがおをつくりました。「女の子だから土俵に上れないんだ。」と気づいたからです。

いまでもこのときのことを思い出すといろんな気もちでぐちゃぐちゃになりますが、出場について二てん三てんしたのは、だれかが女の子も出場できるようにがんばってくれたからだとうれしいです。

大ずもうのれきしやでんとうの大切さも知っているので、土俵にあがれないのは、しかたのないことだと思います。でも、いつか上がることができる日があるといいなと思います。

お兄ちゃん

小学校三年 佐藤美空

わたしのお兄ちゃんは五年生です。そしてひまわり学きゅうのクラスにもいつています。わたしはなぜ、お兄ちゃんはひまわり学きゅうなのかわからなかったです。お母さんに、「なんでお兄ちゃんはひまわり学きゅうに行ってるの？」ってききました。お母さんは「お兄ちゃんは、みんなよりになてなことが多かったり、ゆつくりだったり、みんなよりもおぼえるのに時間がかかるから、ひまわり学きゅうで、できることをふやしているんですよ。だから、お兄ちゃんにとって五年二組と同じくらいひまわり学きゅうも大切なんだよ。」と教えてくれました。わたしは、なるほどと思いました。

お兄ちゃんはできないことが多いかもしれないけど、だれにでもすつごくやさしいお兄ちゃんです。とくにわたしにはすつごくやさしいお兄ちゃんです。たまにけんかもするけれど、けんかのあともやさしいです。だからすぐになかなおりします。

わたしはお兄ちゃんのやさしいところが大好きです。それと、だれにでもやさしいお兄ちゃんはすごいと思います。できないことが多いのかもしれないけど、やさしいところはだれにもまけません。だから、お兄ちゃんの五年生のおともだちは、みんな

やさしく、お兄ちゃんがこまっているときは、たすけてくれたり、時間がかかるときは、まってくれます。

やさしいお兄ちゃんのまわりには、やさしいおともだちがたくさんです。だれにでもやさしいお兄ちゃんはすごいです。じまんのお兄ちゃんです。お兄ちゃんが大好きだから、できないことは何でもわたしがやってあげたくありません。でもお母さんが「お兄ちゃんのできないことをぜんぶやってあげてしまったらそれはお兄ちゃんのためにならないから、ほんの少しのサポートとゆつくりじつくりまってあげることが一番だよ。」っておしえてくれました。わたしも、五年生のお兄ちゃんのおともだちのように、お兄ちゃんやひまわり学きゅうの人がこまっているとき、おてつだいをしてあげたり、ゆつくりまってあげたり、おうえんしてあげれる人になりたいと思います。そしてお母さんがおしえてくれた、すこしのサポートとゆつくりじつくりまってあげれる人がたくさんふえたらいいなあと思います。

一人ひとりが大切にされるまちに

小学校五年 山村 琉偉

「ここがアメリカだったらな。」と母がふと言いました。ぼくは理由が分からなかった。母に聞くと「アメリカは自閉しようスペクトラム障がいの人にも理解がある国だからやで。」と教えてくれました。ぼくの弟は自閉しようスペクトラム障がいです。理解をしていることの方が多いのですが上手に話すことができません。弟は思っていることを話すことができない、コミュニケーションを取るのも少し難しいです。

でも母は、弟が診断されてから色々な本を読んだり、調べたりしてきました。それでも「まだまだ全部を分かてあげれないわ。」と悩んでいるみたいです。

弟は、見た目では障がいが分からないので、他の人に誤解されることが多いです。誤解されることも多いけど分かてくれる人も多いです。

いつも弟と一緒に散ぱつに行っているおっちゃんの子息さんも発達障がいがあるつて言っていました。弟は前に違う散ぱつ屋できついことを言われて散ぱつが嫌いになりました。でも、おっちゃんは弟のことを優しく見てくれて時間がかかると「もうちよつとやから頑張つてや。」と声をかけてくれます。すると弟も、おっちゃんにコチョコ

コチョコしたりして、嬉しそうにしています。いつも顔をしてくれるおばちゃんも、「お顔をそるよ。」と一つ一つに声かけをしてくれるので、弟も安心するみたいです。

弟のクラスメイトも、いつも弟が学校に行くとき迎えに来てくれたりしていて人気者です。

「診断された日、目の前が真っ黒になって琉月のことを受け入れられなかった自分が恥ずかしいわ。琉月が自閉しようスペクトラム障がいであつた。今までより、もっと視野が広がつた。」と母は言っていました。

母は「色んな人に助けられてここまでこれたから次は、お母さんが助ける番やな。」とよく言っていて、資格などを取つて障がいのある子の力になっていきたいそうです。ぼくも医者になつて、なぜ発達障がいが起こるのかを見つけれられるようになりたいです。

琉月、琉偉の弟に産まれてきてくれてありがとう。いっぱいけんかもするけど琉月が大好きだよ。

障がいがある、ないに関わらず、困つてる人や少し苦手が多い人を、得意な人やできる人が手助けしていける世の中になつてほしいです。

アメリカのように日本も、見た目や少し違うところがあるだけで冷たい目で見るとではなく、優しく温かい目と手で包みこめるようになってほしいです。



そんな世の中になったら、みんな笑顔で幸せな毎日になると思います。少しの優しさが集まれば大きな優しさになるので、少しでもいいのでみんなが優しさの貯金ができるようになりますように。

障害のある人の人権

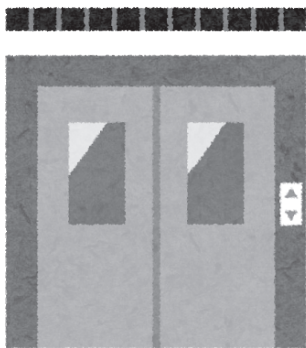
小学校六年

川端 かわばた

歩 あゆむ

ぼくの、お父さんとお母さんは、障害のある人たちのお世話をする仕事をしています。ぼくは、今六年生ですが、小学校低学年のときから、学校が休みの日には、お父さんやお母さんの仕事場についていっていました。お父さんは、障害のある子どもたちのお世話をしています。ぼくも行ったときは、その中に入って仲良く遊んだり、支援員さんとも話をしたりして過ごします。障害があつてその事業所に来てる子どもたちと遊んでいても、学校で友達と遊んでいるときと、なんにも変わりません。それは、ぼくがこの子たちの障害を気にしていないからだと思います。お父さんはそういうのが、本当のノーマライゼーションとかと、難しく言うけど、ぼくにはよくわかりません。でも、ちよつと前にお父さんが言ったことがあります。「世の中の人はどんな人も自分ひとりでは生きていけない。いろんな人の力に助けてもらつて生きている。ご飯を食べることがするのは、農家の人がお米を作ってくれるから、お肉を食べられるのは、牛や豚を育ててくれる人がいるから、服を着られているのは、服を作ってくれる人がいるから、家でゆつくりお風呂に入つてテレビを見てねられるのは、電気や水道や家

を作ってくれる人がいるから……。だからどんなにえらい人でも、たくさんの人に助けてもらつて、やつと生活できる」つて。「障害のある人は、そんなぼくたちより、ちよつとだけ多く助けてもらつて生活しているだけなんやでえ」つて。「自分で歩けないから車いすにのつて移動する。ただ、しんどくなつてきたら人に押してもらうだけ、そうしたらちゃんと移動できる。」つて。足の悪い人が、二階にある駅から電車に乗るために、階段をあがろうとするが、一人では上がれない。でもエレベーターがあれば、楽に二階の駅まで上がることができる。その人の足が悪いのが障害ではなくて、エレベーターがないのが、障害だつて。ぼくには、全部理解することはできないけど、障害のある人がいれば、ぼくにできることはないかを考えて行動していきたいです。



女性が輝ける社会へ

中学校一年 安部 さつき

先日テレビで目を疑うようなニュースを見ました。そのニュースとは、某大学が「女性には結婚や出産で離職するから。」という理由で女性受験者の入試点数を一律に減点し、女性の合格者を減らしていたことです。私は、「これは女性差別だ。」と強く思ったので、このニュースについて三つの視点から考えてみることにしました。

一つ目は、受験生としての立場です。二年後には私も高校受験生になります。きつと受験生は第一志望の学校に合格するために必死で勉強していると思います。しかし、裏で点数を下げられて不合格にされると今までの努力が水の泡になってしまいます。このようなことが起きると受験生は何を信用していいのかわからなくなり、心にも傷が残ります。本当に許されないことです。受験生の不安を無くすためにも、一刻も早く男女平等で安心して受験できる対策をとってほしいと思います。

二つ目は、女性としての立場です。昔は「男性は仕事、女性は家事や育児」が当然のこととされてきました。しかし、今は共働きが増えてきたにもかかわらず、家事や育児は女性がするという古い考えがまだ残っていて、男性と差別されることも多いの

です。そのため、女性は仕事と家事、育児の両立で負担がかかってしまいます。このような差別を無くすには女性にとって働きやすい環境を作ることが大切だと思います。私は、家事や育児を夫婦で分担してすること、会社も子育て中の女性を理解してあげることが必要なのではないかと思います。そうすれば女性の負担も減り、結婚や出産で離職しなくてもよいからです。

三つ目は、日本人としての立場です。海外メディアは、今回のニュースに注目しています。日本は先進国の中で一番女性の医師が少ないと言われていて、女性医師率四位のフィンランドは、「女性医師が結婚や出産で辞めなくても仕事を続けられるようにする技術が日本にはない。」と厳しく指摘しています。特にヨーロッパは男女平等化が進んでいて、たくさんの女性が社会で活躍しているのです。また、OECDジェンダー白書によると、「日本は男女差別解消が経済成長をもたらす」と記しています。私は海外から「今の日本はダメだ。」と言われているようで残念な気持ちになりました。私も将来、結婚して仕事と家事・育児を両立させているかもしれない。

そのときには、今より女性差別が解消されていて男性と同じように働くことができます。日本になつてほしいです。そして日本の女性医師の数も増えていてほしいです。私は、今回のニュースで男女差別が、日本の成長を止めてしまうほど深刻な問題だと学びました。今、私にできることは普段から男女平等を心がけることです。お互いに尊敬、協力していくことが差別を無くす一歩だと思うのです。

祖父と車いす

中学校一年 近藤心喜

私は、この夏に大切な経験をしました。それは、祖父の介護です。

私の祖父はお風呂場で転んで足を怪我しました。だから、買い物に行ったときに車いすを使いました。そのとき、私が車いすを押してあげると祖父は照れくさそうな顔で「ありがとう。」と言って喜んでくれました。祖父に笑顔で「ありがとう。」と言われて嬉しかったです。私は小学生のときに授業で少しだけ車いすを押したことがあったので、車いすを押すことに不安はありませんでした。しばらくすると祖父は「怖い。」と言って私に車いすを止めるように言いました。私は、何が怖いのかなと思っていると祖父は「スピードが速すぎる。」と言いました。祖父にとっては怖いと感じるスピードだったのです。私は普通に押していたつもりだったので驚きました。実際に私も車いすに乗って姉に押してもらうと、いつもより視線が低くなり、ジェットコースターのような速さを感じ、自分が思っているように動けないので怖いと思いました。だから、祖父が怖いと感じたのは、当たり前だなと思いました。また、人混みの中や狭いところだと車いすを動かすにくかったり、段差があると車いすでは、上がれないの

で平らなところを探したりとても大変でした。私は、この経験から介護の難しさを学びました。私の祖父と祖母は出掛けることが好きで私とバドミントンで遊んでくれます。そんな祖父や祖母にいつまでも元気でいてほしいと思いました。

今、日本は高齢社会で介護を必要としている人がたくさんいます。総務省統計局の調査によると平成二十九年度の六十五才以上の高齢者の人口は、三千五百十四万人で総人口の二十七・七パーセントを占めています。つまり、二十六人の私のクラスで例えると七人が高齢者ということになります。信号が青のうちに渡りきれなかったり、スローパーで重い荷物を運ぶことが辛そうだったり、町で困っている高齢者を見かけることが増えました。みんなが思いやりをもつて助け合うことが大切だと思います。だから、私は地域や学校で困っている人がいたら積極的に声をかけることから始めていきたいです。

祖父と一緒に暮らす

中学校一年 澤井 将成
さわ い まさなり

ぼくのおばあちゃんが先月、天国にいったので、おじいちゃんの今後の生活について、親族と話し合いました。おじいちゃんは、八十四才で、耳が遠く、ショックで、心身ともに弱っていました。親族は、施設かぼくの家に行くように言っていました。でも、おじいちゃんは、住みなれた家で、一人暮らしをしたいと主張しました。

どうしても、おじいちゃんが心配なので、一緒に生活することにしました。おじいちゃんは、ぼくの家になれていないので、ぼくは、鍵の場所や部屋の使い方を紙に書いてはっておきました。また、おじいちゃんは、元気がないので、ぼくと一緒に寝ています。お風呂にも一緒に入っています。ぼくは、できるだけ、おじいちゃんがしたいことは、優先したり、危険なことにならないように心がけています。遠くにいるおばさんも、毎日おじいちゃんに電話をしてはげましたり、元気づけています。そのおかげで、おじいちゃんは、前より少し元気になりました。

高齢者には、介護保険のサービスがあると聞きました。でもおじいちゃんは、まず自分の力でがんばると言っています。ぼくも、おじいちゃんの気持ちに寄りそってあ

げたいです。みんなが、おじいちゃんについて考えたり見守ってくれて、ぼくもお母さんもおばあさんもおじいちゃんにいます。

でも、高齢化が進み、高齢者だけで、住んでいる人が多くなっています。仲良しの親族や、家族が、いない場合は、大変だと思いました。高齢者の人の希望にこたえることは、高齢者の生きがいにもつながっているので大切だと思います。おじいちゃんが長生きして、一緒に暮らし続けられるように、助けていきたいと思っています。



ハーフとして生まれた私

中学校二年

私と弟は日本とアメリカのハーフです。

私たちは、アメリカで生まれたのですが母が日本人なので、アメリカと日本の二つの国籍を持っています。

私たちがアメリカから日本へ引越してきたのは、小学四年生になる日でした。「宇宙人」や「外人」といわれ、からかわれることがよくありました。私は目の色がヘーゼル色なので、日本人の茶色の目をした子どもにとって目の色が違うだけで、他の人と同じではないと感じたのでしょう。アメリカでは色んな人種の人たちが暮らしています。肌の色が違えば目の色も髪の色も違います。その為、他の人と見た目が違うのは、ごく普通のことだという認識のもと、生まれてからその環境で過ごすので、皆が外国人だっったりします。初めは、「宇宙人」や「外人」と言われ悲しかったのですが、母が「ハーフは私の大好きなミックスジュースなんだって!」と教えてくれました。大好きな牛乳と桃とバナナとリンゴが混ざった、大好き尽くしなのだと思うと嬉しくなりました。目の色も髪の色も肌の色も変えることはできません。私は、自分の体を大事に思っ

生きていこうと思います。

小学六年の頃の帰り道、男の子に「外国人だ!」と言われたのでハーフ、または、ミックスよ!と言うと、「えー!?そーなん!?!」と話し返してくれ、「そうね、アメリカと日本のミックス!」と言うと「おもしろいな!」と笑ってくれたとき、なんだか、今まで自分が作っていた壁みたいなのが、ガタガタと音を立てて崩れていく気がし、心が踊るような楽しい気持ちになりました。

ハーフとして生まれ、学んだのは、差別される人の悲しい気持ちでした。そして、日本の良いところ、アメリカの良いところを知ることができました。

これからは、ハーフ、ミックスに生まれたことを誇りに思い、日本人でもある私、アメリカ人でもある私、ハーフ、ミックスでもある私を私が受け入れて、差別のない明るい未来になるよう心がけていきたいです。

同和問題について

中学校三年 菅野歩花

「差別はいけない」これまで何度人権学習で学んできただろう。私と同じように、多くの人が人権問題について学び、考えてきたこの時代に、今も様々な社会的不利益に苦しめられている人たちが、存在するということに疑問を感じる。

私が同和問題を初めて身近に感じたのは、高校受験の相談をしたときの祖父母の「あそこは同和地区だから。」という言葉だった。すぐには理解できなかったが、帰ってからその言葉が頭から離れなかった。インターネットで調べてみると、同和問題は江戸時代より前からあった「えた・ひにん」という身分制度の外におかれた人が、当時からひどい差別を受けてきたことが、今も完全にはなくなっていないという問題だった。同和地区に住んでいるというだけで、結婚を拒否されるという人も少なくはなく、そのため、自分の出身地を隠しながら生活する人も多いそうだ。祖父母は、差別をしようと思い、この言葉を口にしたわけではない。私のことを真剣に考えてくれているからこそ出た言葉だということは十分よく分かる。しかし、江戸時代より前からあったこの差別が、今もまだ残っているのだと思うと、私は少し怖くなった。

インターネットで調べているうちに、同和問題は今注目されているLGBTなどの人権問題とは違い、少し風化されてきているように感じた。だからこそ、軽はずみな発言や行動で、自分が知らない間に相手を傷つけていることや、傷ついている人がいることをつねに頭の中に入れておかなければいけないと思った。

私は最近まで、「自分一人が平和を願うくらいで、すぐに世界が変わるわけではない。」と思っていた。しかし、そうやって、差別に対して無関心になってしまっている人がたくさんいることが、現在になっても様々な人権問題について悩まされている人たちが減らない一番の理由だと私は考える。

同和問題について、私はもっと多くの人にこの現状を知ってもらいたいと思った。そして、後世にも伝えていきたい。そのためには、今まで目をそらしていた人権問題についても目を向け、興味をもち、自分の進むべき道を歩んでいこうと思う。

障がいがあるということ

中学校三年 田村雅弥

僕は二才のときに、自閉症と診断されたそうです。僕にはその記憶がありません。ただ、みんなより動きが遅いことや、苦手なことや分かり辛いことが多いです。

小さいときから、家族に助けってもらい療育を受けて頑張ってきました。その中で、いろんな障がいがある人たちがその人たちを支える人や先生方に出会うことができました。目に見える障がいの人や僕みたいに、目に見えない分かりにくい障がいや途中から障がい者になった人など、いろいろな障がいがあると中学になってから分かるようになりました。各障がいにあわせた支援やサービスがありますが、みんながうまく活用しているのか分かりません。そして、障がい者の安心して過ごせる場所がどれくらいあるのか分かりません。健常者にはあたりまえで簡単な日常生活でも、障がい者にとってはとても不自由だったりするのです。

中学の福祉体験授業で学ぶことができ、少しでも多くの人が障がい者について理解をしてくれたらうれしいです。

僕は受験生になりました。みんなと一緒に勉強をしたいので、たくさん勉強をして

います。でも、高校は義務教育ではないので、進路を決めるのはなやみました。まだまだ支援学校への対応も十分だとは思いません。みんなが希望する進路に安心して進めるようになればいいのかなと思います。

これから進学、就職に向けていろんな人たちと関わり、助けてもらいながら自立できるように頑張りたいと思います。

いろんな障がいの人たちが安全で安心して、健常者と同じように過ごせる環境になってほしいなと思います。そして、僕も困っている人がいたら声をかけたり、助けてあげられる人になろうと思います。



「みんな同じ」を実現するために

中学校三年

笹川 ささがわ

泉 いずみ

私は小さい頃から家族みんなでスキーのボランティア活動をしています。

参加資格の制限はなく、誰でも参加できるスキー大会です。そのスキー大会には毎年いろいろな人が参加します。今年の最年長と最年少の年の差は八十才もありますが、同じ舞台で戦います。また、障害者クラスの方もチェアスキーであったり、立位の片足であったり、ブラインド（目が見えない）や聴覚障害の方も同じ舞台で戦います。

普通のスキー試合は出られる人が限られていて、上手な人だけ、学生だけ、障害者だけなど「みんな同じ」ではない大会がほとんどですが、この大会は誰でも参加できます。オリンピックとパラリンピックでさえ別々に開催されているのに、一緒にやるのですから、誰もが困らないようにいろいろな工夫が必要です。

例えば、障害者の人は障害が不利にならないように係数をかけてタイムを出します。これで健常者とタイムで競うことができます。年配の選手や子どもの選手のために、大会スケジュールも普通よりたくさんさんの時間をとったりして、開催しています。工夫とは相手の立場に立ってみるのが一番必要です。もし自分が車椅子に乗っていた

ら？耳が聞こえなかったら？などの立場に立ってみることで、誰も我慢することなく同じように楽しむことができ、みんなが笑顔になれます。手伝うではなく、一緒にすること。ボランティアを続けていて一番学んだことは、みんなができるように工夫すること。人任せにせず自分で考え、どんな場所でも「みんな同じ」がいろんなところで実現できるように、当たり前前の工夫を続けていきたいです。



私は未来の話をしているんです

中学校三年 坂井田 紡

人権は今や小学生でも知っているものだ。それはひとえに、学校や家庭での教育の成果だろう。しかし、人権という考え方が許されなかった時代があった。その頃の人々に権利はなかった。ただ国の道具として戦争のために使われていた。これらの事実を知ったとき、私は人権が平和への架け橋になるのではないかと思ったのだ。

今日から夏休み、と少し浮ついた気持ちで迎えた七月二十一日。変化は唐突に訪れる。「これ食べたら原爆展行かへんか。」

と父に誘われたのは、その日の昼御飯を食べているときだった。原爆展には何度か行っていたことがあったのだが、宿題に少し余裕があったので行くことにした。それは「堺原爆展」というもので、堺市に住んでいる被爆者一世、二世の方々が主催している。毎年写真や絵をたっぷり使った展示で原子爆弾の恐ろしさを私たちに教えてくれる。今年も、部活動の中学生がたくさん来ていて、賑やかな会となっていた。父も私も展示を見終わったので、帰るのかと思いきや、

「ちょうどDVDやるみたいやから、観て帰ろう。」

と父。いつのまにか七十数分のDVDを見ることになっていた。案外長いな、と思いながら観始めた私だったが、五分も経つ頃には釘付けになっていた。DVDはアメリカのオバマ前大統領の広島訪問を皮切りに、原子爆弾の仕組みや広島、長崎で被爆された方の証言が記録されていた。目を背けたくなるような場面もあったのだが、私は目をそらすことができなかった。なぜならそれは、その方々の現実だったからだ。私の浮かれた気持ちは吹き飛び、最後にはあるお二人の言葉が重たい余韻となつてまとわりついていった。ある女性が言った。

「過去の話で終わってほしくない。私は未来の話をしているんです。」

背筋が伸びた。そう、私たちは過去を知るだけではいけない。学んだことを現在、未来をつくる材料にしなければならぬ。この言葉は静かに、けれど確実に私の心の奥深くへしみわたっていった。また、長崎で被爆された男性はこう言った。

「これだけは確実に言えるんです。戦争になったら、あなたが死にますよ。」

衝撃が走った、体中に。大げさではなく本当に。今まで人の良い笑みをたたえながら話していたら、この言葉を言うときにだけ見せた真剣な顔と、感情がむき出しの悲痛な声は、今でも鮮明に覚えている。また、この言葉を聞いて納得した自分がいた。戦争が起きれば、死ぬのは家族や友人ではなく自分なのだ。自然災害で死ぬのは、予知能力もないのだから、人間には防ぎようもないかもしれない。しかし

戦争は違う。空襲や原爆で亡くなった方々のように自分が死ぬとき、その死にかたを自分で決められないのは嫌だと思った。それと同時に、私が嫌だと思うことは、当時はもつとたくさんあったのだろうと思った。そして気がついた。戦時中の人々には人権がなかったのだと。

私は戦争について分かっているつもりだった。戦争を経験された方にはかなわないが、同世代の人よりは分かっていると思うていた。しかし、そんなことは何の価値もないように思えた。なぜなら、どうして戦争はしてはいけないのか、戦争について学んだことをどう活かすのかといった、自分の考えと呼べるものを私は持っていなかったからだ。DVDの名は「かたりつぐ」だった。正にあのお二人の言葉は私の心に語り継がれた。戦争はある日突然起きたりしない。防ぐことができるのだ。そして人間はそのための手段を持つている。相手のことを見ることができる。相手の話を聞くことができる。自分の意見を伝えることができる。仲直りの握手をすることができる。これらの行動は人権を尊重することそのものではないだろうか。つまり、人権を尊重することが戦争を防ぐことにつながるのだ。だから、私たちは人種、信条、性別、社会的身分又は門地に関係なく相手のことを見て、話を聞き、自分の意見を伝えなければならぬと思う。それは他でもなく自分の未来のために。



私のコミュニケーション

支援学校高等部三年

高山愛海 たかやまあみ

私は生まれつき聴覚障がい者である。発音はあまり上手ではないと自覚しているが、声を出してコミュニケーションを取ることが好きだ。

そんな私は、ショッピングも好きだ。かわいい洋服屋があると、つい入って見てしまう。ショッピングをしていると、必ず店員さんに声をかけられる。店員さんも服が好きで商売しているから、当然だと思うが、私は声をかけられると構えてしまうことが多いかった。それは以前、何度か

「耳が聞こえないので、メモをしてもらえますか？」

とお願ひしたとき、店員さんにきょとした顔をされたり、筆談をしてくれるが書き方が雑だったり、接客対応がどう変わるか不安だったからだ。

しかし、私と同じように聞こえない母とショッピングに行くたび、母は自ら店員さんに声をかけ、ゆつくりと話し、店員さんとても楽しそうにコミュニケーションを取っていた。「はあ。すごいなあ。」といった感じで母の後ろに隠れて、母に任せていた。そんな私を見た母が、

「将来、愛海が一人で買い物をするとき、自分から言えるように、今のうちに慣れておかないといかんよ。」

ときらつと言ってきたので、私の気持ちなんてお見通しなのだとびっくりしてしまった。

自分の中では分かっているけれど、「何だか怖いんだよ……。店員さんにどんな顔をされるんだろう。」とショッピングをするたび思っていた。ショッピングをもつと楽しみたいのに、声をかけられると、

「何でもありません。」

と言っていた自分を洋服屋の鏡越しに毎回見ていたので、「情けない。よし、言ってみよう！」と思い、自分から

「試着してもいいですか？」

と身振りをつけてゆつくり話してみた。そうすると、嬉しそうに笑顔で対応してくれたので、少し気が楽になった。声をはっきりと出して、服の組み合わせや色などの相談をしてみた。店員さんも私と同じように身振りをつけてゆつくりと話してくれた。それは母と同じ話し方だった。「母みたいにゆつくり話すのもありなんだな。」と筆談ばかりこだわっていた私は、自分の一番伝えやすい方法を身につけられたような気がした。



このように、自分がまず実行に移すと、相手は必ず見てくれるから、自分に一番合ったコミュニケーション方法を追求していきたい。そして、今日も声を出して話していきたい。

地震と聴覚障害

支援学校専攻科1年

耳の不自由な女性が、「架け橋 聞こえなかった3・11」という映画を作った。聞こえない人たちの東日本大震災の状況を撮った映画だ。
僕は聴覚障害がある。耳が不自由な人は、地震が起こったことを聞いて知ることができない。地震が来たことはメールで知らせてくれる。けれども、東日本大震災のとき、津波が来ることはわからなかった。また、避難場所がどこにあるかもわからなかった。そうだ。

避難所の場所は学校の体育館が多いが、場所がどこにあるのか言われてもわからない。電柱に貼ってある緑の看板を見たことがある。「広域避難所」と書いてある。しかし、体育館の看板は見たことがない。なので、どこにあるのかわからない。地図が看板に書いてあれば、看板を見れば聞こえなくても避難できる。

言われても、聞こえないからわからない。筆談をしてくれば、読んだらわかる。耳の不自由な人は音を出してくれてもわからないので、肩をたたいてもらえれば、顔を見ることが出来る。筆談をしてもらえればわかる。

避難所がどこにあるかわかれば、高齢者や体に障害のある人、走れない人を助けて連れていく。地震が起こったとき、ガス管が壊れたり、水が来なくなったりする。お風呂や料理などの水が来なくなる。そんなとき、給水車が来ることがわかったら、重い水を運ぶことができない高齢者の手伝いができる。

地震が起こったら、僕も高齢者などを助けたいと思う。聞こえないからわからない。だから、わかるように伝えてほしい。そうすれば、僕も困っている人を助けることができる。



優しい気持ち

成人 安田正子

私の孫は十七歳「祥」と言う。黙って澄ました顔で何かを見詰めていると、とても知的な好青年に思える（祖母馬鹿）。

私が彼の顔をみて、相談するように「又は『世間話でもするように』楽しく話しかけると暫くじつと聞いていて、まるで『わかったよ』と言うように、にこつと笑って、笑みを含んだまま『うんうん』と、頷いてくれる。

絶対嫌な顔も、奇声を発することも無く穏やかに、いつも笑って頷いてくれる。

祥は「発達障害（両上下肢の著しい障害）」である。

でも小学校は健常者の人たちと一緒に通っていた。母親が学校に送って行くと、友達走って迎えに来て、鞆や荷物を持って、教室に連れていってくれるそうだ。ついて行く祥はもちろん、連れていってくれる友達も、とても楽しそうに――。

先生のおっしゃって下さるには「教室の癒しです。祥君が居るとクラス全体が穏やかになります」と、とても有難いお話である。当初、運動会を見学に行ったとき、車椅子に乗って、どっち向いて行くかも知れず、急げ！と、心で叫ぶのだが意に反して、

やたらゆつくりと……。でも誰の罵声もなく、必死に「早く、早く」「祥君頑張れ！」と、応援してくれている姿には、優しさが溢れていた。このまま差別、いじめ等うけず、死ぬまで穏やかな日々を送らせてやれたらと、願う。

二年前、障害者支援施設での入所者十九人刺殺、職員と合わせて二十六人の重軽傷を負わせた戦後最悪の大量殺人事件があった。犯人は容疑を認めた上で、障害者に対する強い偏見を表わしている。「障害者なんて、いなくなつてしまえ」「障害者は不幸しか作れない、いない方がいい」と、言っていると書かれていた。

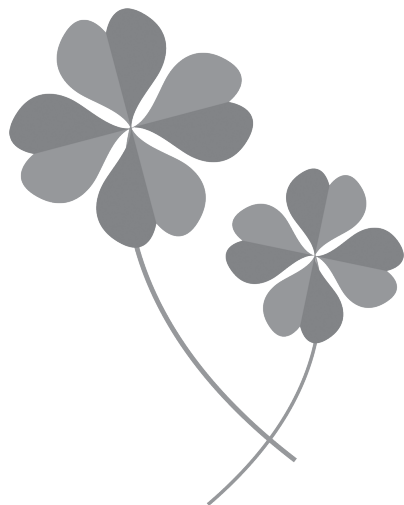
犯人の成長のどの時点で、このような悲しい心が芽生えたのかと、つくづく考えてしまう。勝手な思いだが、祥のクラスの人たちも、同じ空間に居る障害児に寄り添うことで、優しい気持ちに育まれたのではないのか、と思っている。

祥には十二歳違い、今五歳の妹が居る。わかっているのか、いないのか、呼ぶのは「お兄ちゃん」だが、せつせと世話をしている。パンをあげたり、自分がお菓子を食べるときは、必ずお兄ちゃんの口にも入れる。

何の疑問も感じている風でも無く、兄は決して特別な人では無いのだ。いつも一緒に寄り添っている仲の良い兄妹なのである。

これがとても大事なことはないのだろうか、今は、障害の壁を越えて、あらゆるジャンルで繋がっていただける時代である。

健常者も障害者も同じだと言うことを、社会の人々は深く、強く、理解すべきだと考えている。事件をおこした人のような偏見を持つことを、無くすために。



認められるということ

成人 おおくぼ 大久保 真代

二〇十八年、六月二十七日。私が生まれ育った大阪でもついに「同性パートナーシップ宣誓証明制度」の導入が発表されました。

当初、九月頃に導入と聞いていたので、あまりの早さと突然さで信じられない気持ちと感激する気持ちとでニュースを読みました。

私は同性愛者です。そして、そのことを自覚したのは子どもの頃からでした。私が女性であり恋愛の対象が同性であると言うと、男性が嫌いなんだと言われたりもしますが、そういうわけではありません。私には、心から尊敬する異性も、困ったときには私のできる限りで力になりたい異性もいます。

ただ、私が心を惹かれるのが同性というだけです。でも、このことはなかなか理解されることもないです。そして、同性を愛するということも……。

初めて同性の恋人ができたとき、すごくうれしい気持ちと、隠さないといけないという気持ちで、私も彼女も悩みました。表向きは、仲の良い友達、二人でいるときは恋人同士。思春期で周りの友達にも彼氏ができ始め、デートの話をしているのを聞い

ていましたが、私が彼女とのことを話すことはありません。でも、二人でいる時間が増えていくほど、お互いに好きという気持ちも増えていき、このまま誰にも認められないなら、一緒に死のうという気持ちにもなっていました。結局、彼女とは別れましたが、私自身、同性愛者ということに重荷を感じ、何度もこのまま消えてしまいたいと思いました。

大人になり、同じような悩みを抱えている人たちとも知り合い、性的マイノリティに対する偏見を取り除こうとする動きが世界的に活発になってきました。まだまだ当事者に風当たりが強いとはいえ、私が学生の頃などと比べると、素晴らしい変化だと思えます。

よく、「同性婚とかなんでも二人でいればいいじゃない」という意見も聞きますが、それは、当然に婚姻制度がある上で、その選択をしないことを選べるから言えることだと思えます。当事者にとって、将来を感じることができる制度があるということは、とても重要なことです。

大阪で同性パートナーシップ宣誓証明制度が導入された夜——何より、私が生まれ育った大阪が、自分自身をどこかで否定し続けて生きていた私を認めてくれた気がして、涙が止まらなかつたです。本当に死ななくて良かった、生きていて良かったって、心から思いました。



これから日本でも世界でも、こういった動きが活発になっていくことで、たくさんの同性愛者が、自分自身を肯定し、強く生きていけるようになると思います。

私は日本人？

成人 吉川 笑美菜

私の母は日本人で、父はパキスタン人です。私は、ほとんどニュージーランドとオーストラリアで育ちました。

日本語ができると思っていた私は、いざ日本に住んでみると、読み書きがほとんどできませんでした。それがきっかけで、堺識字・多文化共生学級「つどい」に行くことを決めました。

初めて「つどい」に行った日、全体学習で「私の折々のことばコンテスト2016」の最優秀作品「『ハーフ』じゃない『ダブル』だ」という言葉に出会いました。その言葉の内容が私自身にも似ていたので、私も自分のことを書いてみることにしました。私は、小学一年生までは日本で育ちました。二年生から五年生までは、ニュージーランドでくらししました。五年生から六年生までは、日本でくらししていました。最初の頃、クラスみんなは、日本語の読み書きができなかった私にやさしくしていましたが、とちゅうから勉強ができない私を無視するようになりました。私はすごく笑う子だったけれど、その当時はぜんぜん笑っていませんでした。

今でも一番いやだったのが、一年生の子に「早く自分の国にかえれ！」と言われたことです。日本人の母から生まれ、日本の国で生まれたのに、なんでそう言われないういけなかったんだろうと思いました。

中学生になってオーストラリアで住み始めました。高校生になって、大阪に遊びに行ったときに自転車に乗っていたら、小学生に「見て、ガイジンさあ」と言われました。そのときも、ふと思いました、「ああ、私って外国人なんだなあ」と。

私が日本人か、外国人かは、もう考えるのはやめました。考えれば考えるほど、わからなくなるからです。

よく、おばあちゃんに「だって私、外国人じゃん。」と言ったら、すごく怒られました。「笑美菜は、外国人じゃない！私の孫やろう！ママも、日本人だろう！」と怒られました。そのとき、「そうだ。私は、日本人の血が流れているんだな。」と思いました。

今は、日本人の男性と結婚し、日本でくらししています。今考えれば、私が日本人であるのかないのかは、関係ないんだなと思いました。私を、笑美菜という一人の人間として見てくれている人がいるから。

子どもの頃みたいに、もう人がどう思っているかは、気にしない。私は一人の人間として、笑美菜という人として、これから生きていきたい。国や肌の色で人を見たくない。人を人として、もつといろんな人を知っていきたいです。

夕やけの空にひびく「七つの子」

成人（中学校夜間学級三年） アダチ キナルシア カズミ

からす なぜなくの からすは 山に……

私のお母さんは、十五歳のときに、家族みんなでブラジルに渡ったそうです。土地はありましたが、米作りにはあわなくて、たいへんひもじい毎日を送ったそうです。その後十八で結婚し、四人の子どもを育ててきました。私たち兄弟は、小さいころから畑仕事がおわった夕暮れどきに、お母さんの歌う日本の童謡をきいて、大きくなりました。今思うとお母さんは遠い日本につづく美しい空を見ながら、ふるさとをなつかしんでいたのでしょうか。

私は今年、四十九歳になります。二十一歳のとき一人で日本に来ました。そのころ、ブラジルには仕事がなく、日本にいた二人の叔母をたよってやって来たのです。二十四時間かけて、やって来ました。家族と離れて暮らすのは初めてで、とてもさびしかったです。仕事は魚をさばいて、パックづめにするものでした。アパートに帰ると、体中から魚のにおいがしました。洗っても洗ってもなかなか落ちません。日本語はわからないし、ポルトガル語で話せる友だちは一人しかいませんでした。ブラジルにいる

ときは、両親と朝から夜まで畑をたがやしたり、豆や綿を育てたりしていました。畑で母は「七つの子」や「お手々つないで」を歌います。この二つの歌だけは、歌詞の意味を知らない私にも歌えます。日本に来て、つらい夜には、この歌が心にうかびなぐさめられました。

お母さんはブラジルにわたり、六十年という長い年月をすごすことになりました。ポルトガル語は私たち子どもの勉強をみながら、少しずつおぼえていったそうです。

私は今、殿馬場中学校夜間学級で勉強しています。日本語はむずかしいです。そして、日本語がわからないと、ほかの勉強もわからないのです。うまく気持ちを伝えることができなくて、ときどき悲しくくやしいこともあります。何年たっても、なかなか自分の日本語に自信がもてません。そんな私ですが「七つの子」と「お手々つないで」を歌うときはちがいます。日本で生まれ育った人と同じように歌うことができるのです。歌えば、目の前には一面に広がる白い綿の花が見えます。となりには、綿花をつむお母さんがいます。私とブラジル、私とお母さんをつないでいるのは日本の童謡なのです。そして、お母さんと日本をつないでいるのもまた、幼いころから口ずさんできた童謡なのでしょう。

かわいい 七つの子 あるからよ……

お母さん、カズミの心から、この歌がきえることはないよ。

人権について考えるとは何か

成人 片平浩介 かた ひら こう すけ

六年前にクボタに入社し、これまで多くの業務を経験した。その中の一つが事業所内における人権啓発担当である。月に一回程度外部の講演会等で人権に関する知識を身に付け、時には従業員に対して講義を行うこともある。その中でどうやったら従業員の人権感性を高めていけるだろうかと考えていた。

私は今年の八月に一週間の育児休暇を取得した。平日は帰宅が遅いことが多く、恥ずかしながら、専業主婦である妻に家事育児全般まかせっきりになっている状況である。その為、育児休暇期間中は、「授乳以外の一切の家事育児を私が行う」と宣言し、育児休暇がスタートした。一日目は子どもと接する時間が増えたこともあり楽しく過ごせたが、二日目以降からは自分の時間を取れないことに苛立ち始め、三日目で妻の助けを借りてしまう形になった。私は育児休暇期間中に妻と同じ日常を体験することで、妻の立場や苦勞を心から理解することができた。

「相手の立場になって考えることを意識したいと思います。」人権啓発研修の受講アンケート等でこのような感想がよく出てくる。もちろん、その考えは決して間違っ

おらず、人権を考える上で相手の立場になって考えることは最も重要なことである。しかし、相手のことを知らないまま、相手の立場で考えることは難しい。相手と同じ体験をするか、事実を知らない限り、相手の痛みや苦しみを理解することはできない。企業における人権啓発研修においては、人権に関する情報を定期的に提供していくことで従業員の人権感性の向上を図っている。しかしながら、そこには受講者本人の積極的な受講姿勢があつて初めて高い効果を発揮することができる。稀に、「これまで知らなかった人権問題をわざわざ取り上げるから、変に意識してしまう。だから差別はなくなるらない。」という寝た子を起すな論を唱える人がいる。人権研修の担当者として、まずは寝た子を起すな論は間違いであることを伝え、新たな知識を身に付けることが相手の立場を思いやることに繋がることを、受講者に認識してもらう。それを第一のステップとしていきたい。

人権感性は一朝一夕で高めることはできないからこそ、私自身も今後も継続して人権知識習得に努めていきたい。

選考にあたって

このたび「第三十九回わたしからの人権メッセージ」に応募していただいた皆様、どうもありがとうございます。また、特選を受賞された二十名の皆様、入選を受賞された三十名の皆様、おめでとうございます。

今年度は、二千七百十九点にも及ぶ多くの作品が寄せられました。このうち小学生が一千三百六十五点、中学生が二千二百二十一点、高校生が二十二点、成人が百十一点でした。この取り組みの広がりや深まりを審査員一同、うれしく思います。

選考では、一次審査で二千七百点を超える作品を五十点に絞り込み、さらにそこから二十点の特選作品を選出いたしました。審査にあたっては、さまざまな体験や知り得たことを自分自身の問題として捉えられているか、差別をなくすためにどのように行動しようとしているか、またその作品が広く市民の人権意識向上につながるものであるかを、大切なポイントといたしました。

今年度は、応募作品数が増え、さまざまな年齢層の方からのすぐれた作品が集まりました。今年度は地震や集中豪雨、台風など、災害が多く発生した年でもありましたので、自分にできることや

命の大切さなど、災害時の人権について考えたという内容が印象的でした。

また、「誰ひとり取り残さない」という理念をもつて国際社会全体で取り組む「SDGs(持続可能な開発目標)」をテーマとした作品も、さまざまな年代で書かれていました。その中で、中高生が書いた作品は、新聞などを読み、自らの課題として自分にできることを考える内容でした。

さらに、市民の皆様のボランティア活動や地域活動など、普段の生活を通して、人権の大切さに気付いたという作品の内容から堺市における人権意識の広がりや深まりも感じました。

思いのこもった素晴らしい作品との出会いを、ありがとうございました。

また、メッセージとして届いていない人権課題や声なきSOSもあると思います。そのことを忘れずに、私たちは今後も人権を守るための積極的な活動に取り組んでいきます。

「わたしからの人権メッセージ」を契機として、すべての人が人権問題を自分自身のこととして捉えて行動し、堺から人権文化の花が咲き、人権尊重の輪が家庭、学校、職場そして地域社会へと広がっていくことを願っております。

審査員長 山口 典子

(堺市人権教育推進協議会副会長)

応募作品テーマ内訳表 【応募数】 (単位：点)

テーマ	学年		中学校	高等学校 /大学	一般	分野別合計
	1・2・3年生	4・5・6年生				
同和問題	0	244	18	0	3	265
女性の人権	2	76	64	1	4	147
障がい者の人権	15	109	165	7	21	317
外国人の人権	1	41	59	2	9	112
子どもの人権	7	23	283	2	9	324
高齢者の人権	2	11	32	1	9	55
LGBTなど性的マイノリティの人権	0	7	48	0	15	70
平和問題	197	337	133	0	2	669
環境問題	3	6	77	1	1	88
HIV感染者ハンセン病回復者の人権	0	1	7	0	0	8
犯罪被害者やその家族の人権	0	2	13	0	1	16
インターネットと人権	0	1	58	3	3	65
SDGs(持続可能な 開発目標)	0	0	4	1	1	6
堺セーフシティ・プログラム	0	1	9	0	0	10
憲法と人権	0	2	18	0	0	20
その他さまざまな人権について	100	177	233	4	33	547
学年別応募数	327	1038	1221	22	111	2719
年代別応募数	1365		1221	22	111	2719

【今年度応募作品の傾向について】

- 平和問題、子どもの人権、障がい者の人権をテーマとした作品が特に多かった。平和問題をテーマとした作品では、小学校は学校全体で行われる平和学習から考えた作文、中学校は修学旅行へ行くための事前学習や現地で学んだことについて書いている作文が多く、学校教育での熱心な取組みが分かった。
- 女性の人権をテーマとした作品では「医学部の不適切入試」や「土俵への女人禁制」を取り上げた内容が多くあった。あらゆる世代から応募されており、小学校低学年の児童からも、女性に対する差別を自分のこととして実感し、自分自身の将来や生き方を考える内容の作文が届いた。
- 子どもの人権をテーマとした作品では、家族とのつながりを再確認する内容や、どのような大人になりたいかを考えた作文が多くみられた。
- インターネットと人権をテーマとした作品では、いじめを取り上げた作文が多かった。子どもにとって、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）などのツールを利用したいじめが大きな人権問題として認識されていることがうかがえた。
- LGBTなど性的マイノリティの人権をテーマとした作品は、応募数が増え、関心の高まりを感じた。また、当事者からの声も多く、メッセージ性の強い作文が多かった。
- 今年を反映した作品として、堺市が取組んでいる「SDGs(持続可能な開発目標)」をテーマとした作文や、度重なる地震や集中豪雨、台風などの影響から、災害時の人権をテーマとした作文が、幅広い年代で書かれていた。

ご応募いただいた学校その他団体名

浅香山小学校	市南小学校	英彰小学校	榎石小学校	家原寺小学校
鳳西小学校	光竜寺小学校	五箇荘小学校	さつき野小学校	三寶小学校
錦西小学校	城山台小学校	新増尾台小学校	西陶器小学校	泉北高倉小学校
白鷺小学校	登美丘西小学校	登美丘東小学校	八田莊小学校	野田小学校
大仙西小学校	はつしば学園小学校	八田ひかり小学校	はるみ小学校	東浅香山小学校
土師小学校	浜寺東小学校	原山ひかり小学校	福泉中央小学校	深井小学校
浜寺石津小学校	東三国丘小学校	平尾小学校	福泉中央小学校	八下西小学校
東陶器小学校	福泉上小学校	美松台小学校	宮山台小学校	
福泉小学校	熊野小学校			
榎塚台小学校				
安井小学校				
赤坂台中学校	浅香山中学校	旭中学校	泉ヶ丘東中学校	上野芝中学校
大泉台中学校	大浜中学校	金岡北中学校	金岡南中学校	五箇荘中学校
津久野中学校	☆殿馬場中学校夜間学級	☆中百舌鳥中学校	☆八田莊中学校	☆原山台中学校
☆晴美台中学校	☆東百舌鳥中学校	☆美原中学校	☆深井中学校	☆深井中央中学校
☆美木多中学校	☆南八下中学校			☆陵西中学校
堺高等学校	泉北高等学校	だいせん聴覚高等支援学校		
インターユース堺 (IYS)	☆(株)クボタ堺製造所	堺・教師ゆめ塾	堺識字・多文化共生学級「つどい」	☆堺自由の泉大学 (五十音順)

※五年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。
ご協力ありがとうございました。

第39回わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2018年12月発行

編集・発行 堺市人権教育推進協議会
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市人権推進課内
電話 072-228-7420
FAX 072-228-8070

審査員

井上知子
(堺市人権教育推進協議会常任幹事)

江川玲子
(堺市教育委員会生徒指導課主任指導員)

奥井光治
(堺公共職業安定所管理部長)

塩尻公
(堺労働基準監督署副署長)

瀧口住子
(堺市男女共同参画センター館長)

根木進
(大阪法務局堺支局総務課長)

松尾恵子
(堺市人材開発課長)

美濃部桂子
(堺市人権教育推進協議会常任幹事)

宮田大
(堺市人権教育研究会事務局次長)

山口典子
(堺市人権教育推進協議会副会長)

△敬称略・五十音順▽

私たちのまち堺から
人権文化の を咲かせよう

この作品集は、「第 39 回わたしからの人権メッセージ」に
応募された 2,719 点の作品のうち、特選作品 20 点を掲載したものです。